

第31回 熊本大学附属図書館貴重資料展

細川家臣・道家（どうけ）家の 幕藩初期と明治維新

解説目録

期間 平成27年11月1日（日）～3日（火）

10時～17時

会場 熊本大学附属図書館 1階

古文書閲覧室・ラーニングcommons

細川三斎（忠興）書状
〈追伸部分自筆〉

主催 熊本大学附属図書館・熊本大学文学部附属永青文庫研究センター
協力 公益財団法人永青文庫
後援 熊本日日新聞社・NHK 熊本放送局・RKK・TKU・KKT・KAB

■ 展示にあたって ■

熊本大学附属図書館には、熊本藩主細川家「永青文庫」以外にも旧臣家に伝来した文書群が保管されています。今年、道家一義氏（大阪府）から寄贈された道家家文書もそのひとつです。

細川忠利の小姓頭となり、天草島原一揆で活躍した道家左近、文久期に奉行となって以来熊本と京都や江戸との間を奔

二〇二五年一〇月

稲葉 継陽
三澤 純

催 開 時 同

公開講演会・第十回永青文庫セミナー

第一部 「道家家三代と天草・島原一揆」

講師 稲葉 継陽（熊本大学文学部教授／文学部附属永青文庫研究センター長）

第二部 「〈肥後の維新〉の支柱となった道家之山」

講師 三澤 純（熊本大学文学部准教授）

日時 平成二十七年十一月一日（日） 十四時～十五時半

第一部 道家家の幕藩初期

一 細川家臣・道家家の誕生

道家之山が作り直した道家家初代・たてわき帯刀の肖像画

道家家の初代・道家帯刀一成は近江脇坂氏の出で、浪人後、豊前時代の細川忠興に仕官したとされる（道家家文書）。以来、激動の幕藩初期をくぐり抜けて幕末まで細川家臣として続き、「肥後の維新」の支柱となった道家之山を輩出する。史料3の指物図に見えるように、家紋は丸の内に大の字。

史料1は初代・道家帯刀一成の肖像画。道家家の菩提寺・延寿寺（熊本市河原町）に納められていたものを、幕末期に道家之山が写し描かせたものという。もとの画は明治一〇年（一八七七）の西南戦争で焼失した。本展覧会の主題である「道家家の幕藩初期と明治維新」の冒頭を飾るにふさわしい肖像画である。



- 1 道家帯刀肖像（道家家文書 番外）
- 2 先祖附（永青文庫 南東10）画像なし



3 文久3年（1863）9月 長岡佐渡宛道家角左衛門指物差出写（道家家文書8-8）

若き細川忠利の生々しい血判

当時一八歳だった細川忠利（内記）が、帯刀一成の嫡男で後に自らの小姓頭となる、道家傳三郎（後の左近右衛門尉主成）に差出した血判起請文。忠利はこの前年に細川家の家督継承者に内定しており、本起請文では、傳三郎から「いね」（人質の女性か）を預かるのと引き換えに、将来にわたって傳三郎を取り立てる旨を誓約している。

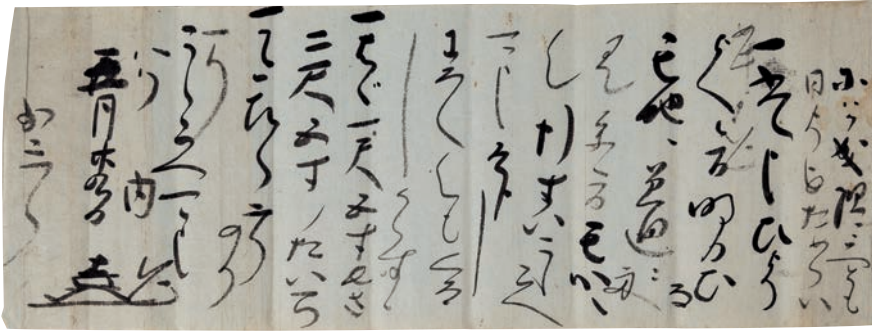


4 慶長10年（1605）7月8日
道家傳三郎宛細川忠利起請文
（道家家文書 1-17）

主君が家臣に与えた起請文としても珍しい文書だが、江戸初期の新参の武士たちにとって主従のパーソナルな関係がいかに重要であったかを物語る文書としても、生々しい。

忠利との揺るぎない主従関係

青色紙を用いた珍しい忠利自筆書状。花押形から慶長一九年（一六一四）頃に比定され、だとすれば大坂陣の直前の時期にあたる。宛名の少三郎は未詳だが、道家傳三郎と同一人物かとも考えられる。



5 （慶長末期）5月29日 少三郎宛細川忠利自筆書状（道家家文書 1-8）

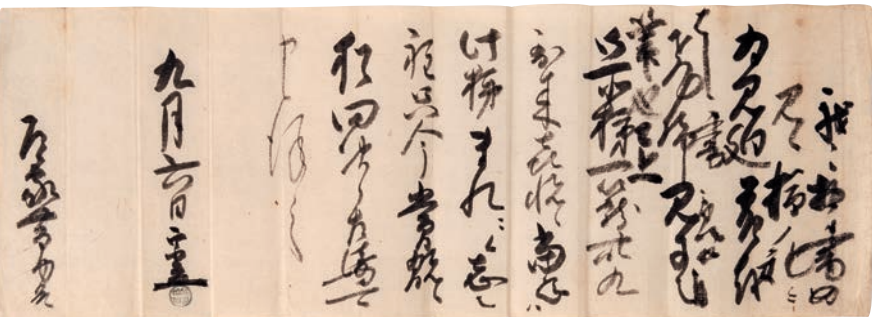
「急な話だが、明日の昼、お前のところに見舞いに行く。行水の用意さえしておいてくれれば、掃除は不十分であつてもかまわない。鯛と帷子を持参しよう」。忠利はこのように伝えている。決戦前に主従の契りを確認しようとしたのではないか。

掃除は不十分であつてもかまわない。鯛と帷子を持参しよう」。忠利はこのように伝えている。決戦前に主従の契りを確認しようとしたのではないか。

戦国世代の二人

— 細川忠興とともに歩んだ道家一成

傳三郎の父で道家家初代の帯刀一成と、忠利の父・細川三斎もまた、強く結びれていた。この文書の時点で二人は、かれこれ三〇年以上もの間、主従関係にあった。



6 （寛永期）9月6日 道家帯刀宛細川三斎書状（道家家文書 1-3）

帯刀から見舞いの柿を受け取った三斎は、視力が弱っているにもかかわらず、文書の冒頭に自筆

でお礼の文言を書き込んでいる。たどたどしい筆跡が老齡の三斎の気持ちを含んで伝えている。

忠利にも一目置かれる道家一成

道家帯刀一成は、時の細川家当主・忠利にも礼儀を尽くした。本文書は帯刀が江戸にいた忠利に年頭の祝儀として革踏皮（足袋）五足を贈ったことへの礼状。肥後入国後、帯刀は加増を受けて知行二二〇〇石の上級家臣となっていた。

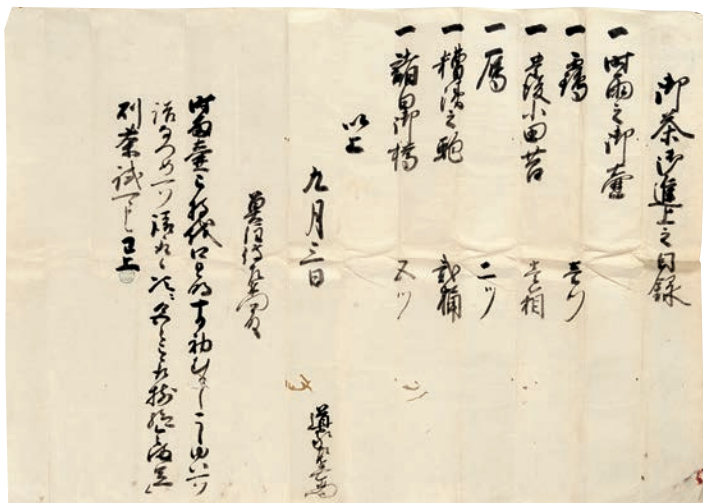


7 (寛永期) 1月28日 道家帯刀宛細川忠利書状 (道家家文書1-9)

は將軍の鷹狩で得られた鶴を何度も拝領している。將軍とは一層懇ろなので、心配なく」と書き込んでいる。幕藩関係の構築というこの時代の政治課題は、一成のような上級家臣と藩主に共有されていたのだ。

道家主成、茶人としても存在感を示す

熊本入封後の寛永一〇年九月、道家左近主成（かつての傳三郎）は細川三斎に茶壺「時雨之壺」をはじめとする品々を進上した。本文書はその目録で、奥（左端）には三斎による受取りの札の文言が記され、彼のローマ字青印が捺されている。道家家二代の主成は、千利休の高弟として知られる茶人としての三斎とも交わる存在であった。



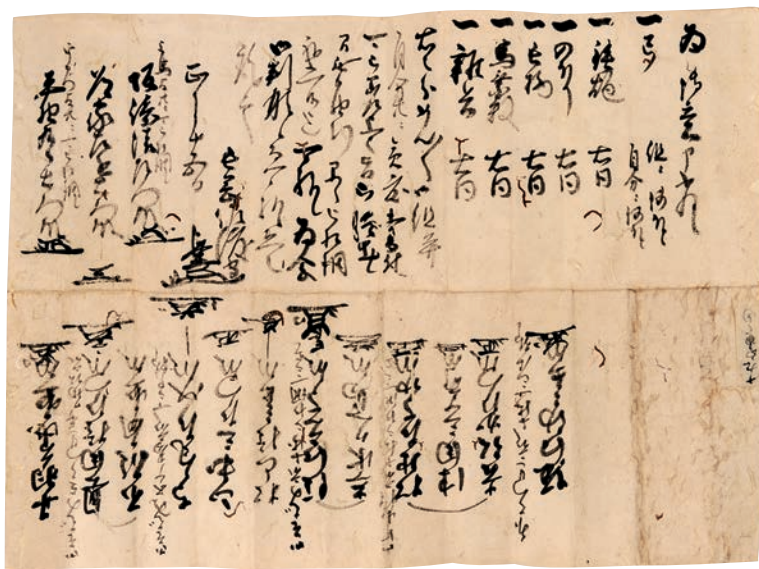
8 (寛永10年 [1633]) 9月3日
魚住傳左衛門尉宛道家左近右衛門尉御茶御進上之目録
(永青文庫23印46番)

二 道家家と天草・島原一揆

松井興長、有馬渡海直後に自軍の構成を把握

正月五日に有馬原城に着陣した筆頭家老の長岡佐渡守（松井興長）が、細川軍の組頭（戦闘単位の統率者）たちに命じた人員・装備報告令である。道家傳三郎はいまや左近右衛門主成と名乗り、組頭の一人として出陣していた。

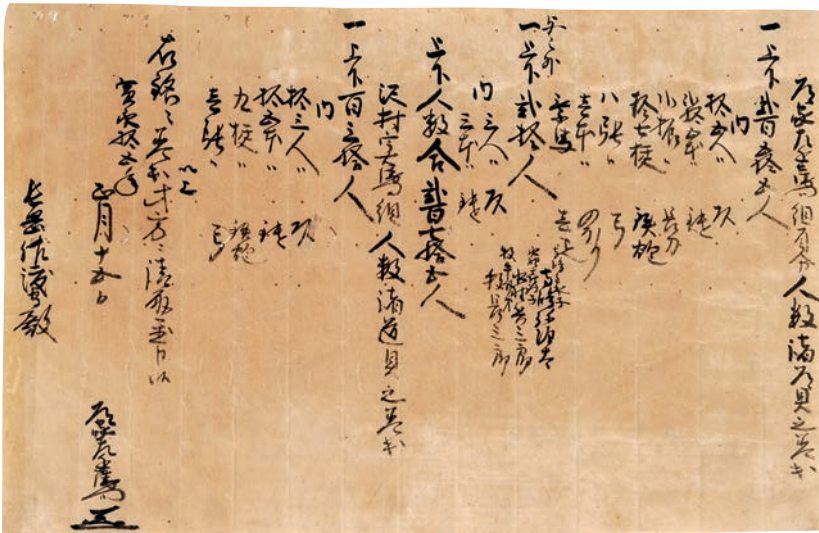
組頭たちの名前（宛名）の下に据えられた花押は、佐渡守の通達を確認した印として本人たちが陣中で書き入れたもの。決戦をひかえた緊迫感をいまに伝える。



9 (寛永15年 [1638]) 1月15日
道家左近右衛門等15名宛長岡佐渡守達書 (永青文庫19.G.4 119.2)

道家主成、組頭として軍団構成を報告

史料9の達書に依りて、道家左近主成が自分と沢村宇右衛門尉の組の装備・人員を記して差出した文書。主成の組は与力二〇人を加えた上下総員二七五人で、鎧二五本、鉄砲一七挺などを備えていた。この差出には明記されていないが、軍団中には多くの下級武家奉公人（雑兵）や浪人衆も含まれていた。主成はこうした軍団を率いて、原城攻撃に活躍することになる。

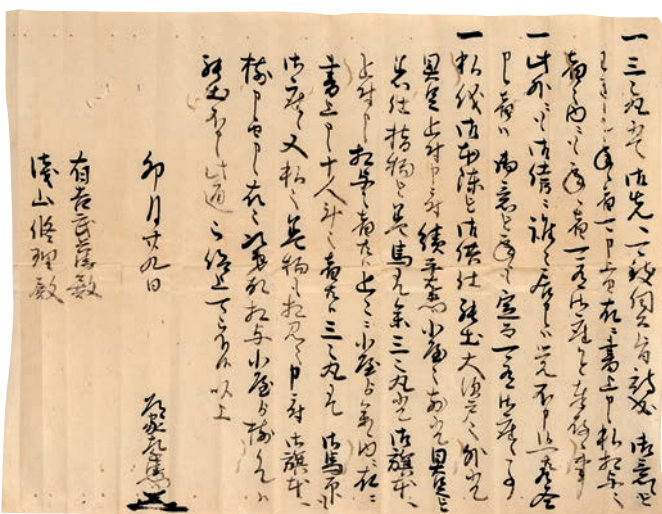


10 寛永15年(1638) 1月15日
長岡佐渡守宛道家左近右衛門尉人数諸道具之差出 (永青文庫101の52.1)

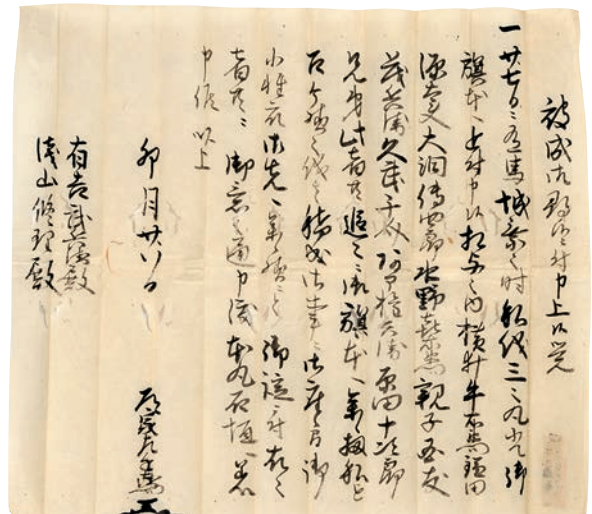
道家主成、原城総攻撃における行動を報告

担当奉行の有吉・浅山から求められた道家左近主成が、二月二七日の原城三ノ丸での行動の詳細を、四月二八・二九日付で相次いで報告したもの。組内の者たちや自分自身が、三ノ丸に乗り入れた細川光尚の旗本に追いついた後に、光尚の指示どおりに行動したかどうかについて、具体的な名前をあげて詳細に上申している。そのうちには、森鷗外の小説『阿部一族』で有名な阿部権兵衛の名もみえる。論功行賞にかかる戦功評価のための報告であった。

この直後、道家主成自身は五〇〇石の加増をうけ、四年後には父一成の知行を相続して二七〇〇石の大身となる。ところが、嫡子が三歳で病死し、正保四年(二六四七)道家帯刀家はあつけなくも無嗣断絶してしまふ。



12 (寛永15年) 4月29日
有吉武兵衛・浅山修理宛道家左近衛門尉差出 (永青文庫19. G.4 口36.7)

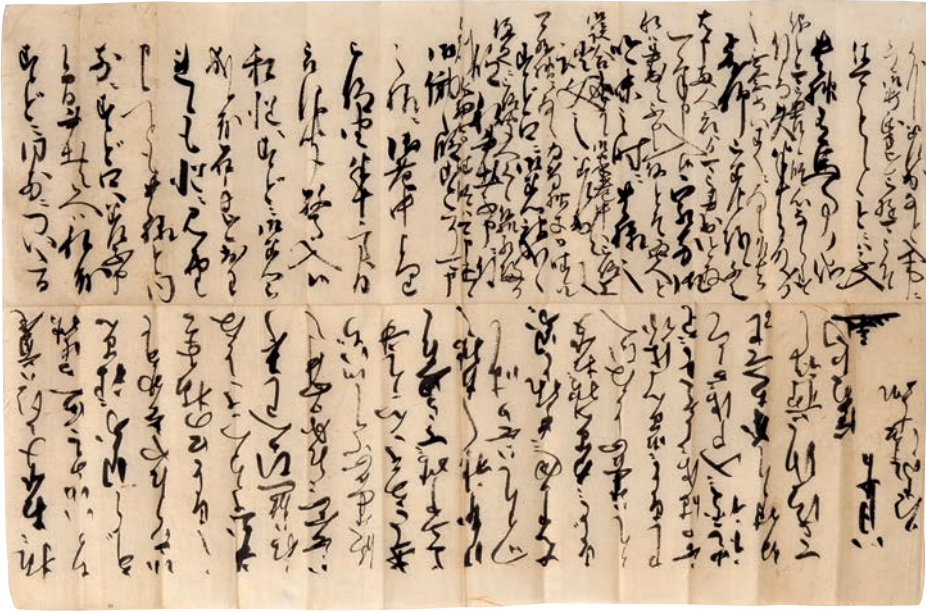


11 (寛永15年〔1638〕) 4月28日
有吉武兵衛・浅山修理宛道家左近右衛門尉差出 (永青文庫19. G.4 口36.2)

どつて証言してくれないの？ 道家清十郎の登場

道家清十郎は道家左近主成の甥にあたり、弱冠一六歳、四人扶持の身で松井興長備のうち西郡要人佐組に属して原城攻めに加わり、手柄を立てた（道家家文書）。しかし清十郎は、同僚の伊藤左内の証言が不十分だったために恩賞配分に漏れたのだという不満を持っていた。

本書は、論功行賞が済んだ八月の時点で、この点について伊藤が清十郎に弁明したものの。清十郎の手柄の証言者としては別の二人が適任だと考えたので

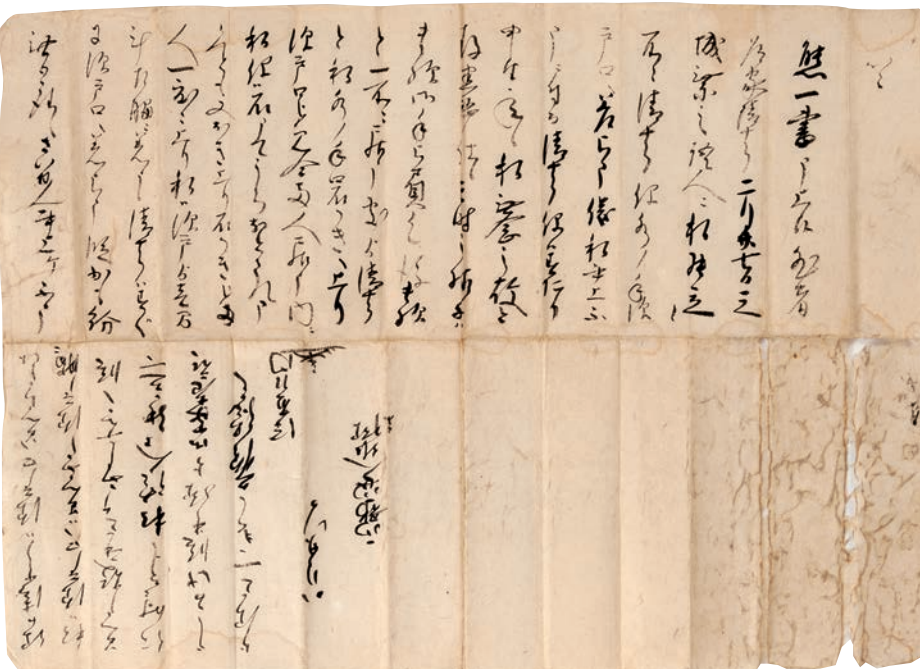


13 (寛永15年〔1638〕) 8月10日 道家清十郎宛伊藤左内書状 (道家家文書2-6)

あって、決して自分はやましい心根から証言を控えたのではない、と述べて、責任回避をはかっている。

恩賞と名誉の獲得こそ武士の命！

「貴様のせいで恩賞がふいになつた」と道家清十郎に恨まれた伊藤が、清十郎の組頭・西郡要人佐に泣きついた書状。原城での激戦の中で清十郎が「水ノ手岩つき」の「須戸口」（原城本丸への乗り入れ口か）に取り着く活躍を見せたのは事実だが、伊藤自身を取り着いたのは「須戸脇」であった。だから軍功調査の過程で自分は清十郎についての証言を控えたのだ、というのが伊藤の言い分。しかし、これからはいつでも証人になるので、家老衆へ取り次いで欲しい、と西郡に依頼している。

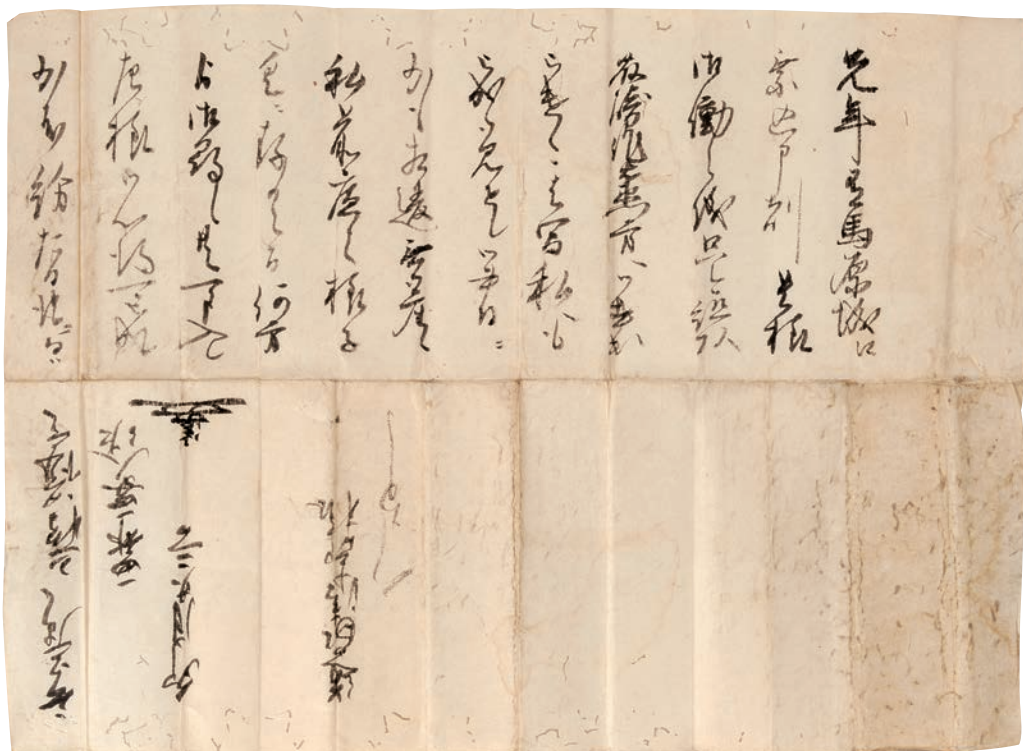


14 (寛永15年〔1638〕) 8月28日 西郡要人佐宛伊藤左内書状 (道家家文書2-7)

恩賞と名誉をかけた清十郎の迫力に圧倒される伊藤であった。

清十郎の執念みのる！
知行二〇〇石を獲得し道家家の名跡を継ぐ

天草・島原一揆の戦功査定から八年を経た正保三年、清十郎の執念はついにのった。史料15で清十郎のかつての上役・西郡要人佐は、先年の原城での清十郎の軍功を当主・細川光尚が認定した「御書出」が出されたことを告げている。



15 (正保3年〔1646〕カ) 4月23日 道家清十郎宛西郡要人佐書状 (道家家文書2-2)

八月一日、光尚は清十郎に玉名郡大田黒村・上樺村・中樺村(現熊本県和水町・荒尾市)に知行合わせて二〇〇石を宛行う旨を記した判物を発給した(史料16)。清十郎八年越しの執念がみのった瞬間であった。

こうして、道家家の名跡と文書は、知行二〇〇石取りの道家清十郎家に引き継がれていくことになり、幕末には道家之山を輩出するのである。

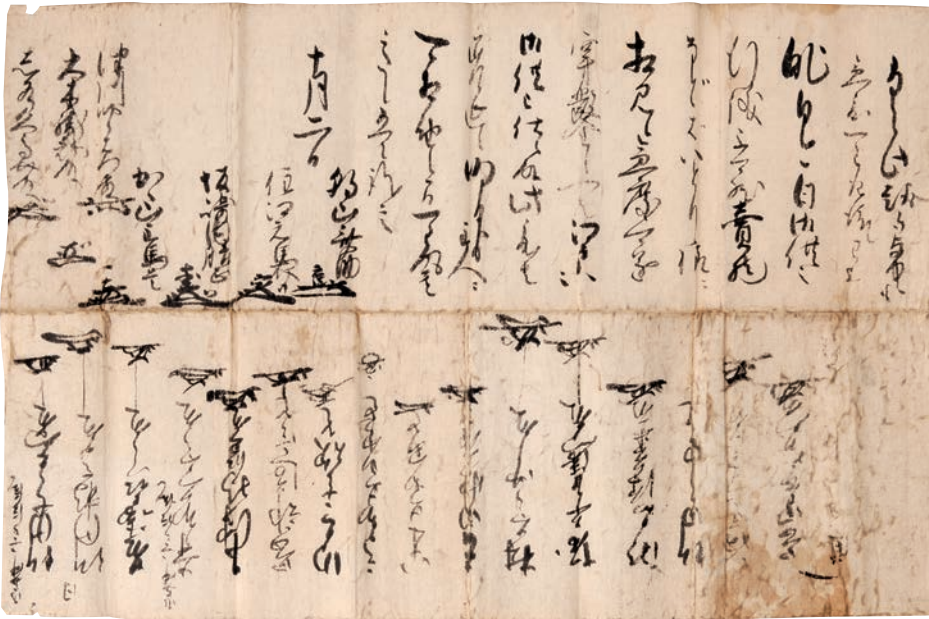


16 正保3年8月14日 道家清十郎宛細川光尚判物(知行所附)(道家家文書4-1)

参勤交代の負担は重く、理不尽な領民転嫁も

寛永一八年九月二十九日、細川光尚は参勤のため熊本を出発した。本文書はその直後、光尚の小姓頭中が、参勤への御供衆の組頭たち（道家左近主成も含む）に到達したものの、「参勤御供衆が「賣物」などを「ばいとり」しているのので、止めさせよ。明日からは組頭の責任とする」と命じている。

「ばいとり」とは「奪い取り」、すなわち掠奪まがいの押し買い行為である。



18 (寛永18年〔1641〕)10月2日
津川四郎右衛門等20名宛朝山齋助等4名書状(道家家文書2-1)

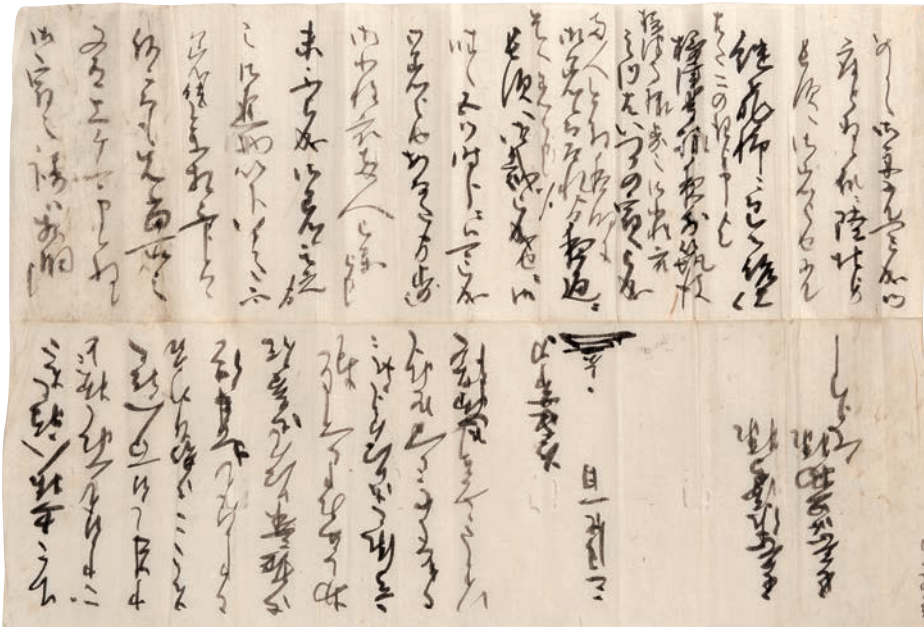
参勤交代の負

担は家中の武士や奉公人たちにも重くのしかかり、城下や路次の住人らに理不尽に転嫁され、こんなトラブルを続発させていた。宛名各自の花押は、通達徹底のために本文書が回覧されたことを示す。

ポルトガル船への対応と九州諸藩の協力体制

帯刀を名乗るようになった道家主成が、長洲（現熊本県長洲町）から継飛脚で熊本の家老に送った書状。「撰津守様」が昨夜、筑後の「はいつかの宿」（現筑後市羽犬塚）に着き、すぐに長洲に移動するとの連絡が入ったので、一〇〇人分の旅籠を用意する必要が生じ、何とか間に合わせた、と伝えている。主成は玉名郡沿岸部の地域管理を担当していたものと推察される。

「撰津守様」とは、島原藩主・高力撰津守忠房と考えられ、彼の動向と道家



19 (正保2年〔1645〕)3月21日
長岡佐渡守・長岡監物宛道家帯刀書状(道家家文書1-13)

主成が「帯刀」を名乗っている期間とを勘案すると、本文書は正保二年に比定される。高力はポルトガル船対策に関して幕府から特殊権限を付与されていたことで知られるが、その機動的な職務遂行は、本文書に垣間見られるような、九州諸藩の協力体制に支えられていた。

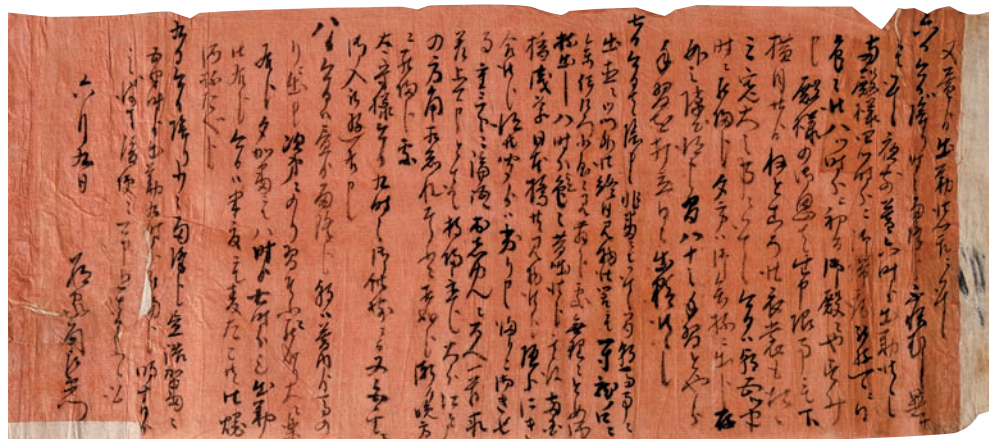
第二部 明治維新と道家之山

一 幕末期、江戸へ京へ

息子に論語、娘に百人一首の江戸土産

史料20は、端裏書に「道家之山」という題簽が貼られた巻紙状で、道家之山が江戸詰していた時の日記である。残念ながら前欠状態であるが、六月六日の記述からは全文が読めるようになっていく。史料2「先祖附」によれば、道家は嘉永七年（一八五四）四月に初めて江戸に出て、安政三年（一八五六）五月に帰国しており、記述内容からして、嘉永七年六月六日から十二月十六日までの日記だと考えられる。

六月七日の記述を読むと、この日、之山は非番で、江戸市中の見物に出かけている。途中で立ち寄った龍口屋敷（熊本藩上屋敷で、現在の東京駅丸の内口付近）の友人の部屋で酒を振る舞われ、「八時分（やつじぶん）」（午後二時頃）まで話し込んでいた。その後、彼は両国橋・浅草・日本橋を回り、自分用に煙管、息子の重三郎に論語、娘の順（本文書では「おしゆん」と標記されている）に百人一首を買って求めている。道家家の「系図」（道家家文書8-6）を見ると、嘉永七年段階で、道家自身は三六歳、重三郎は七歳、順は一〇歳である。江戸詰の武士の日常生活を知ることができ、興味深い史料である。

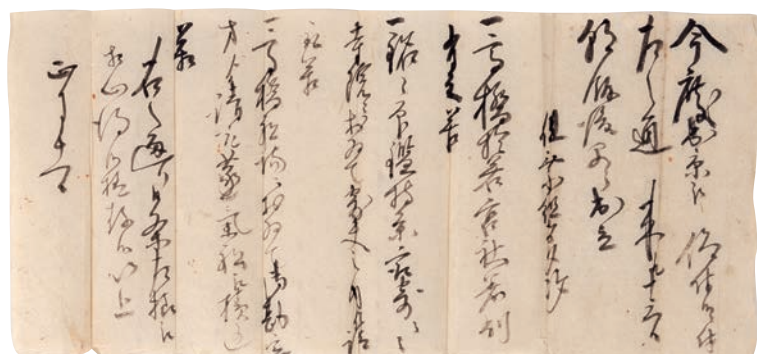


20（嘉永7年〔1854〕）道家之山江戸日記（道家家文書15-1）

京への出発準備が進む港町の喧騒が聞こえてきそうな差紙

「差紙」とは、伝達や命令を伝える文書のことであるが、幕末期に江戸・京都・長崎等を飛び回っていた道家之山は、こうした差紙を何度も受け取ったはずである。ただ道家之山の履歴（史料2及び「御奉公附」「肥後先哲偉蹟」後篇所収）を精査しても一月に出京した形跡は見当たらないので、息子の重三郎宛の差紙である可能性が高い。ちなみに熊本藩が最初の蒸気船Ⅱ万里丸を購入したのは元治元年（一八六四）九月であるから、「蒸気船江積込」とある本文書はそれ以降のものである。

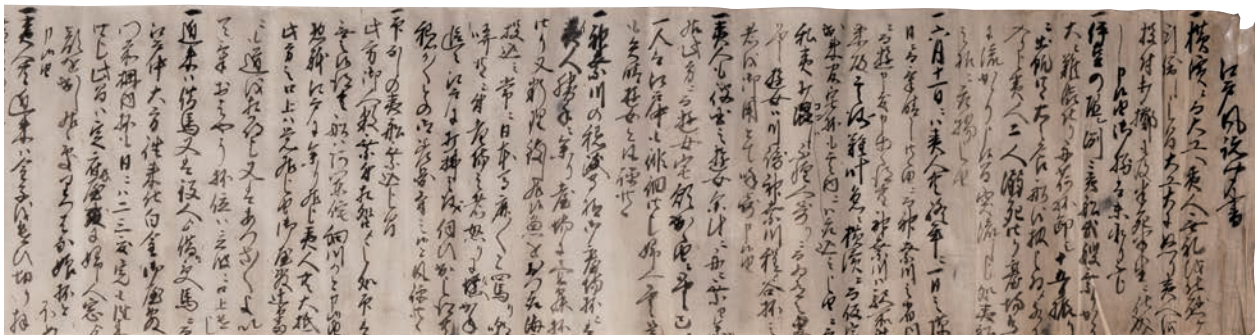
この差紙は、出発日の二日前に届けられ、高橋町の「若宮社」に集合し、最寄りの寺院で人夫を、さらに「船場」で旅費を受け取るために印鑑を持参するように指示している。高橋湊沖の有明海に停泊している蒸気船にたくさんの荷物を積みこむ人夫たちの威勢のいい掛け声や、見送りの家族たちの会話までが聞こえてきそうな史料である。



21（年不詳）1月11日 出京差紙（道家家文書6-1）

江戸の噂を集めて、
熊本に書き送るのも
大切な仕事

史料22は「江戸風説聞書」と題されている文書であるが、年代からして、道家之山が江戸詰だった時に書き始めた覚書だと考えられる。道家はこれをもとに藩庁宛てに正式な報告書を提出したのであろう。「江戸風説」とされているものの内容の大半は開港地・横浜での外国人の行動や日本人とのトラブルの様相である。このように江戸周辺の情報収集して、国許へ知らせることは江戸詰藩士の大切な仕事であったが、特に開港以後の外国勢力の動きを調査することが重要視された結果、このような史料が残されたものと思われる。なお本史料末尾には、道家が京都詰の奉行を務めていた時の情報も書き込まれている。

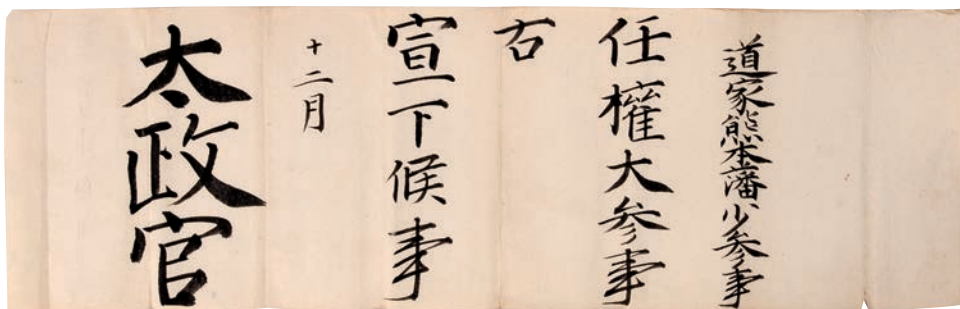


22 (安政末年～慶応2年 [1858頃～1866]) 江戸風説書 (道家家文書13—8)

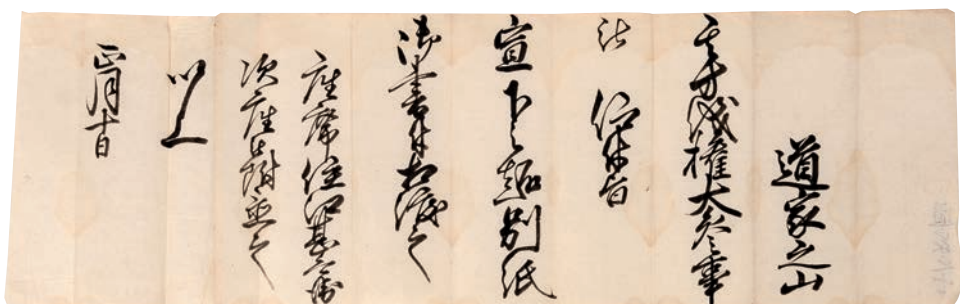
二 明治初年、熊本藩政府の柱石となる

奉行から少参事へ、さらに権大参事へ

道家之山は慶応四年(一八六八)八月まで藩の奉行職を務めているが、特に慶応二・三年は京都詰の奉行であった。幕末の政局は、文久二年(一八六二)以降は京都を中心と動くようになるから、この職に就いていた道家が、熊本藩内でいかに高い政治的位置にいたのかを伺うことができる。慶応三年(一八六七)一二月に明治維新政府が成立した後、各藩重職の人事は、中央政府としての太政官が執行することになり、道家は熊本藩の少参事(奉行クラス)、さらに権大参事(家老クラス)に任命されている。しかし忘れてはならないことは、史料2「先祖附」で確認されるように、明治元年(一八六八)一〇月に、道家は隠居して、家督を息子の重三郎に譲っていることである。つまり史料23・24は、いったん隠居した道家に、藩庁が再び役職に就くように画策した結果、出された任命状なのである。



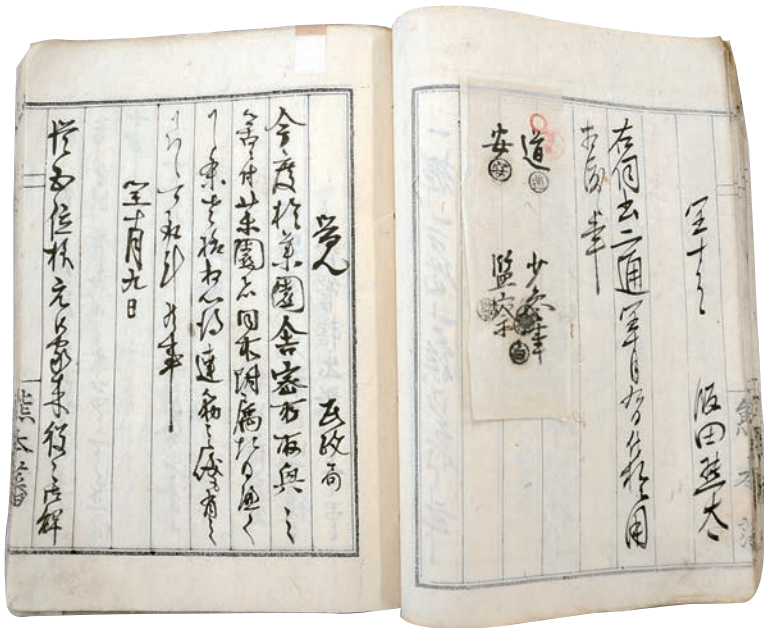
23 (明治2年 [1869]) 12月 道家之山権大参事任命状 (道家家文書6—13)



24 (明治3年 [1870]) 1月10日 同上添状 (道家家文書6—14)

道家之山のサインと決裁印

この藩庁日記は、明治三年九月から明治五年四月までのことが書き記された分厚い書冊で、熊本藩明治三年藩政改革の様相をつぶさに書き記した史料であるが、展示したのは「決裁票」とでも呼ぶべき部分である。明治三年閏一〇月九日に、飯田熊太から出された宇土支藩解体に関わる伺書に対して、藩庁首脳部が承認印を押しているの、そのうち道家の印を確認してもらいたい。他にも長岡護美（朱印）・安場保和らの捺印を見ることができる。



25 明治3年（1870） 藩庁日記（永青文庫13. 4. 19. 1）

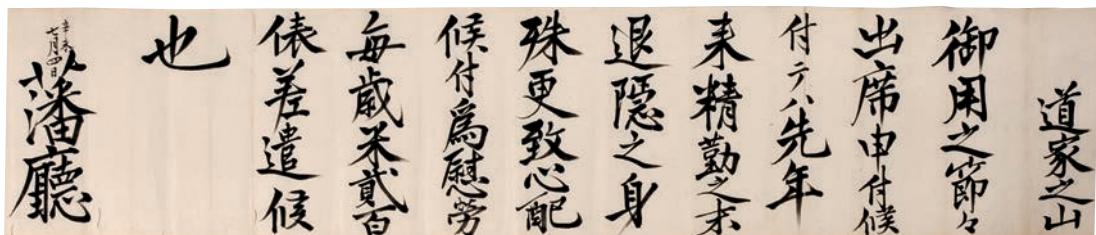
実学党政権も頼りにした
道家之山の行政手腕と人柄

明治三年（一八七〇）七月、熊本藩は、幕末維新期の藩政改革としては全国的にも有名な改革を断行する。その年の正月に権大参事に就任した道家は、同僚・部下のほとんどが改革断行と同時に排除されていく中、新政権に迎え入れられることになった。新政権下で藩主（正式には「知藩事」となった細川護久、その弟で大参事となった長岡護美をはじめ、改革主体となった実学党の人々にとっても道家の行政手腕と人柄とは、必要不可欠のものであったのである。

史料26は、藩庁が道家のこれまでの業績に感謝し、今後の活躍を期待して帷子と屏風とを贈る際に渡した目録であり、史料27は、道家の病気療養に際して、藩庁が「慰勞」として、今後は毎年二〇〇俵支給すると約束した目録である。二〇〇俵は七〇石に当たり、病気見舞いのためだけに七〇石の実質的増加があったということは異例のことであったと考えられる。



26 明治4年（1871）5月25日 褒賞目録（道家家文書6—21）



27 明治4年7月4日 褒賞目録（道家家文書6—22）

三 若き藩主兄弟から、

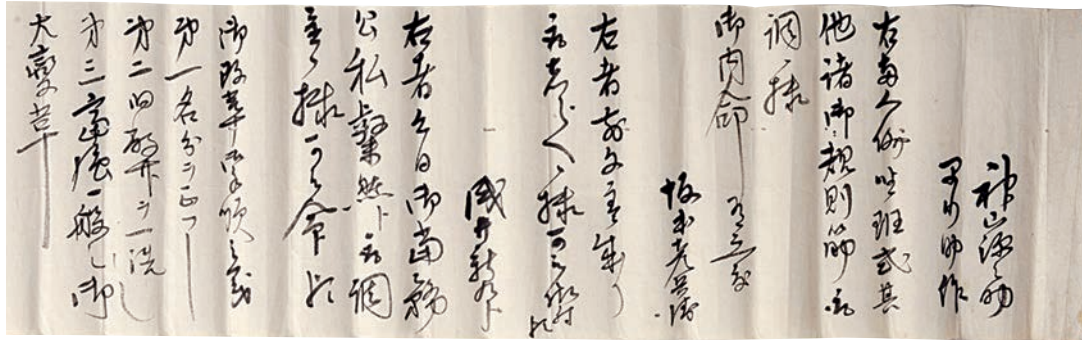
個人的にも厚い

信頼を寄せられた

道家之山

実学党政権成立の舞台裏を
知ることができる極めて
貴重な史料

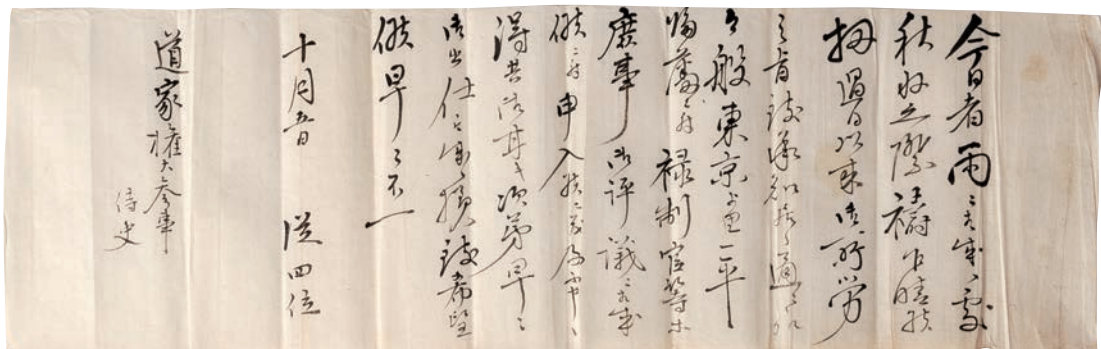
明治三年に熊本藩の命運をかけた藩政改革を断行した実学党政権と道家之山との関係性は先述した通りであるし、このこと自体はこれまでも知られていたことであるが、前政権（学校党政権）から新政権へ誰を残すのかというプランについて、藩主細川護久と道家とが相談していたことを示す本文書は、新発見の極めて貴重な史料である。ここには改革の大義名分と手順とが明記され、そのために前政権にあった人物のうち、神山源之助・早川助作・坂本彦兵衛・浅井新九郎を、新政権に参加させることが書き記されている。本文書も、公文書としての藩庁文書（永青文庫）には見いだすことのできない、私文書の奥深さを物語る史料である。



28 (明治3年〔1870〕5月頃カ) 藩政改革人事案書付 (道家家文書14—34)

道家の病氣回復を
「渴望」する藩主
兄弟

熊本藩の明治三年改革にとって道家は欠くべからざる存在であったが、この年の七月頃から、彼は病を得て、出仕が叶わなくなってしまう。史料29は藩主・護久自らが、史料30は大参事・護美が、ともに道家に宛てた見舞状である。しかし紙面から読み取ることが出来る護久・護美兄弟の切迫度は尋常ではない。一〇月に入って東京出張していた安場保和が帰藩し、中央政府の動向を伝え、熊本藩でも禄制改革・兵制改革が急務となつたらしい。その評議の場に是非とも道家に参加して欲しいと、兄弟は「渴望」している。改革実行主体としての実学党政権における道家の存在意義の大きさに改めて驚かされる。



29 (明治3年) 10月5日 道家之山宛細川護久書翰 (道家家文書14—33)

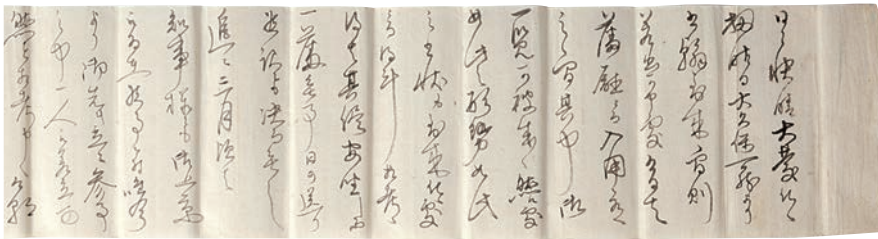


30 (明治3年) 10月15日 道家之山宛長岡護美書翰 (道家家文書14—7)

決断の時！

「このまま」安座「するわけにはいかない!!

本文書は年月を欠いているが、明治四年（一八七
一）一月七日付と断定される。ここで触れられてい
る大久保利通からの書翰を確定することは難しいが、
明治三年一二月に、岩倉具視が勅旨として鹿児島を
訪問中であり、岩倉に同行して大久保も鹿児島島に滞
在していることは重要である。熊本藩首脳部はこの

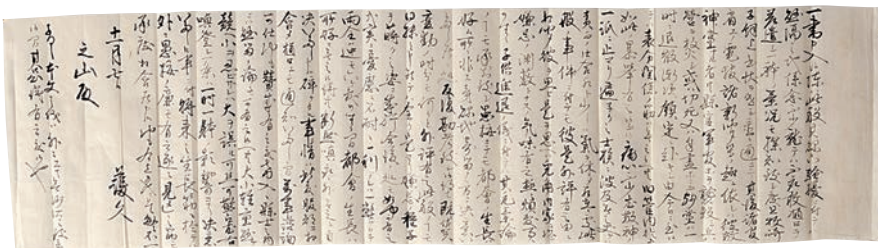


31 (明治4年〔1871〕1月)7日 道家之山宛長岡護美書翰(道家家文書14-12)

機会を利用して、中央政
府改革の必要性を強く訴
えようとしていたからで
ある。この時の心境を長
岡護美は、道家に宛てて
「このまま安座して、一
藩だけが無事に日々を送
るといふ選択肢はない」
と述べている。本文書は、
この一大事に関わって、
護美が、この年の三月に
は細川護久の上京が計画
されていることに際して、
それに先だって参事のう
ちの一人を上京させるか
どうかについて、道家の
意見を尋ねているもので
ある。

神風連の乱勃発に際し、 旧領の動向を心配する 細川護久の書翰

明治四年（一八七二）七月の廢藩置県後、
細川氏一族は熊本を離れ、東京に移住するが、
その後も旧家臣や旧領地とのつながりは長く
保たれることになった。本文書は、明治九年
（一八七六）一〇月二四日に起こった神風連



32 (明治9年〔1876〕11月)7日 道家之山宛細川護久書翰(道家家文書14-1)

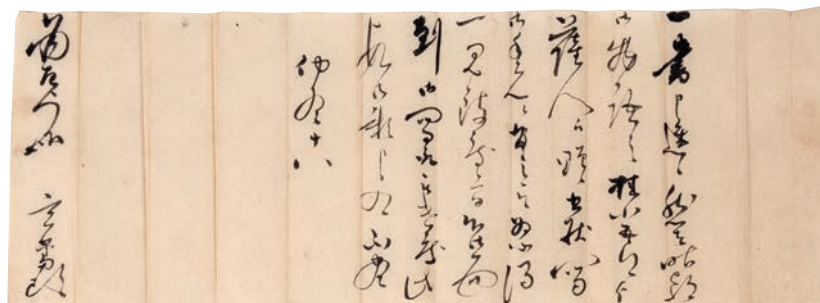
の乱のことを東京
で聞き及んだ細川
護久が、その様子
を熊本在住の道家
に問い合わせてい
るものである。こ
れによれば護久は
子供たちを東京で
はなく、熊本で生
活させたいという
意向を持っていた
が、今回の事件で
この考えを改めた
と記している。藩
体制が解体してか
らも、道家が旧藩
主の良き相談相手
であったことを示
す史料である。

四 藩の内外で培われた幅広い人脈

「桂小五郎の手紙を見せてくれ」

本文書の差出人は、安政年間以後、勘定奉行・外国奉
行・軍艦奉行を務めた永井尚志（玄蕃頭）である。永井
は安政の大獄に連座して免職された後、文久年間から幕
閣に復帰し、京都町奉行・大目付・若年寄を務めた。こ
の文面によれば、道家が永井と面談した際に、長州藩の
桂小五郎（木戸孝允）が薩摩藩士に宛てた書翰の話をし
したらしい。永井は、

その翌朝、道家がその
書翰の写しを持ってい
るのなら見せて欲しい
と依頼するために、こ
の書翰を書き送ってい
る。永井が歴任した職
のうち、大目付は大名
家の監察を職掌として
おり、しかもこの時期、
幕長戦争も起こってい
るので、本文書は元治
元年（一八六二）から
慶応二年（一八六六）
の可能性が高いと考え
られる。いずれにして
も道家が熊本藩の重役
として、幕閣からも信
頼される存在であった
ことを示す史料である。

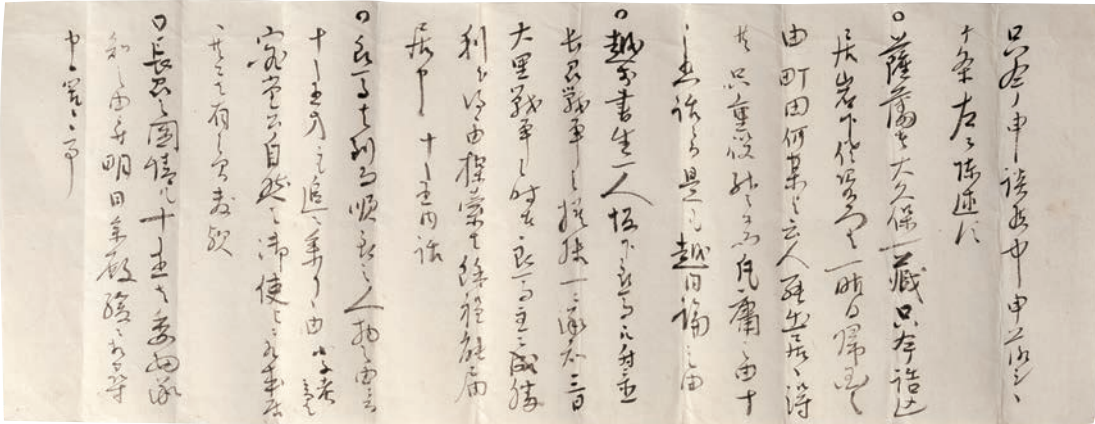


33 (元治元年～慶応2年頃〔1862～1866〕カ)11月18日
道家之山宛永井尚志書翰(道家家文書10-10)

「坂本龍馬はとりわけ『順良』の人物だ」

本文書の冒頭には「只今申談候中申上落シ候ヶ条左ニ陳述す」とあり、四ヶ条が書き記されている。つまりつい先ほどまで道家と会談していた人物が、道家の耳に入れるべき事柄をすっかり話し忘れて、慌てて書面で書き送ったというものである。残念ながら差出人の署名がなく、道家と話していた人物が特定できないが、熊本藩と薩摩・越前・土佐各藩との関係が話題にされていることから、かなりの重臣、場合によっては大参事の長岡護美か藩知事の細川護久かとも考えられる。時期は、長州戦争、特に小倉沖の海戦の様子が書かれているので、慶応二年（一八六六）六・七月頃と推定することができる。

四ヶ条のうち二ヶ条に坂本龍馬（文面では「坂下良馬」となっている）の名前が出ている。熊本藩と関係が深い越前藩の書生が龍馬と行動をともにしている関係で入ってきた情報であるらしい。特に「良馬者別而（わけて）順良之人物之由」という部分が注目に値する。



34 (慶応2年〔1866〕6月ヵ) 会談内容覚書(道家家文書14-40)

第三十一回熊本大学附属図書館貴重資料展

解説目録

細川家臣・道家(どうけ)家の幕藩初期と明治維新

稲葉 継陽 三澤 純 編著

平成二十七年十月刊 熊本大学附属図書館

本目録の無断転載・複製を禁ずる